

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：32607

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K12420

研究課題名（和文）地域住民用 認知症の人の生活行動を引き出すコミュニケーション教育プログラムの作成

研究課題名（英文）The development of a communication program for community residents to elicit daily life behaviors among elderly people with dementia

研究代表者

小山 幸代 (Koyama, Sachiyo)

北里大学・看護学部・教授

研究者番号：70153690

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：認知症のある人が豊かに保持している生活行動の習慣や技法を發揮して日常生活を送るためには、周りの人々によるそれらを引き出すコミュニケーションが必要である。本研究は、地域住民を対象とした「認知症の人の生活行動を引き出すコミュニケーション教育プログラム」を作成し、地域住民にヒアリングを実施した。

その結果、「イラストの説明がわかりやすい」「自分が誘ったり、提案したりする言葉かけをすることで、その人が保持している力が引き出せることが理解できた。できるかどうかわからないがやってみようと思う」などの回答が得られた。本教育プログラムは、教育目的の達成が可能なプログラムであることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本教育プログラムは、エスノメソドロジー研究により「実践されているがこれまでに実証されることがほとんどなかった認知症の人の生活行動を引き出すコミュニケーションに内在するメカニズム(例えば、日常会話の常識的なルールの活用など)」を明らかにした教材を用いた点に、地域住民にもわかりやすいという特徴がある。本教育プログラムの活用により、地域住民が認知症の人が豊かに保持している力の理解を深める効果も期待される。このような理解に基づいたコミュニケーションができる地域住民が増えることによって、認知症の人が自分らしく暮らし続けることのできる社会の実現を目指すための環境を醸成する一助になると考える。

研究成果の概要（英文）：In order for people with dementia to use their habits and techniques abundantly in their daily lives, it is necessary for the people around them to communicate with each other to elicit them. In this study, we created a "communication education program that promotes the daily life of people with dementia" and interviewed some local residents. The results are as follows: "The explanation of the illustration is easy to understand" "I understand that by saying words to invite or suggest to that person with dementia, I can elicit the lifestyle and habits that people with dementia have. I don't know if I can, but I'll try". These results indicate that the purpose of this educational program would be transmitted to local residents.

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症のある人 生活行動 コミュニケーション 教育プログラム 地域住民

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 認知症のある人(以下、認知症の人)がその人らしく生活するための重要な要素の一つは、本人が身につけている生活行動を發揮して日常生活ができることである。なぜならば、認知症になっても豊かに保持されている生活行動の細部にわたる技法や習慣にはその人らしさが反映されているからである。しかし、認知症の人は、認知機能障害によって、本来保持されている生活行動を自ら実行できないという課題を抱えている。したがって、認知症の人が保持している生活行動を引き出すケアが重要となる。このケアは認知機能障害へのアプローチが主であり、認知症の人と関わる人々による言語的・非言語的コミュニケーションによって行われるため、彼らのコミュニケーションスキルの向上が求められる。しかし、これまでの国内外の認知症の人とのコミュニケーションに関する研究はコミュニケーション全般に焦点を当てており、生活行動を引き出すコミュニケーションに焦点をあてた研究は、申請者らの先行研究(小山ら,2015;2016)のほかには報告されていない。そこで、申請者らは、認知症の人が保持している生活行動を發揮して日常生活を過ごすことを支えていくために、ケア提供者を対象とした「認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーションスキル教育プログラム」の開発に取り組んできた。教育プログラムの教材となる認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーションの具体的行為とその根拠をエスノメソロジー的相互行為分析により明らかにし、その教材を使った教育プログラムを作成した。

(2)申請者は、(1)で作成した教育プログラムの一部を活用して、本務の高大連携事業において高校2年生を対象に演習を行った。結果、参加者から自分達にも認知症高齢者にも共通する日常会話のルールがあるということ、それを活用することが納得できたという反応が得られた。つまり、日常会話のルールの活用であるため、専門家でなくてもわかりやすく、一般的な認知症ケア教育でなく、具体的なコミュニケーション教育に特化したプログラムにできる可能性があることが示唆された。

近年、様々な地域で地域包括ケアシステム構築に向けて共助のための事業が推進されている。本研究において地域住民を対象とした『認知症の人の生活行動を引き出すコミュニケーション教育プログラム』が作成でき、活用できれば、地域住民が認知症の人が豊かに保持している力の理解を深める効果も期待される。このような理解に基づいたコミュニケーションができる地域住民が増えることによって、わが国の認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)の基本的考え方「認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れたよい環境で自分らしく暮らし続けることのできる社会の実現を目指す」にある「よい環境」を醸成する一助になると考える。

2. 研究の目的

(1) 申請者らが、ケア提供者を対象として作成した「認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーションスキル教育プログラム」を基にして、地域住民を対象とした『認知症の人の生活行動を引き出すコミュニケーション教育プログラム』試案を作成する。

(2) (1)で作成した試案を地域住民に実施、評価して、本教育プログラムを完成させる。合わせて、広く活用できるように本教育プログラムの実施マニュアルを作成する。

3. 研究の方法

(1) 地域住民を対象とした『認知症の人の生活行動を引き出すコミュニケーション教育プログラム』試案の作成。

文献調査・実践事例調査

ヒアリング

研究協力者にケア提供者を対象として開発した「認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーションスキル教育プログラム」のうち、1回目のプログラム内容(ただし、事例検討説明部分を除く)を受講して頂く。受講後に、理解可能な部分と、理解が難しい部分等を聴取する。

教材開発

本教育プログラムの教材となりうる「生活行動を引き出すコミュニケーションスキル」についての知見を得る。また、視聴覚教材等の検討を行う。

(2)(1)を踏まえて、本研究メンバー全員で協議して、地域住民を対象とした『認知症の人の生活行動を引き出すコミュニケーション教育プログラム』試案を作成する。なお、作成にあたっては、教育学者および地域住民を対象とした教育活動実践者のアドバイスを受ける。

(3)(2)で作成した教育プログラム試案について、地域住民を対象に実施、評価し、『認知症の人の生活行動を引き出すコミュニケーション教育プログラム』を完成させる。また、広く活用することを可能にするために、実施マニュアルを作成する。

4. 研究成果

(1) 地域住民を対象とした『認知症の人の生活行動を引き出すコミュニケーション教育プログラム』試案について

地域住民を対象とした認知症高齢者とのコミュニケーション教育プログラム試案を作成するため、先行研究を検討した。家族介護者(桐明・他,2016)やケア提供者(Mariska, M., et al, 2017)を対象とした認知症ケアに関する教育プログラムは数件みられたが、生活行動や地域住民に焦点を当てた研究はみられなかった。

視聴覚教材の検討のために、DVD「認知症の人の体験世界を感じてみよう」(シルバーチャンネル)の一部で、認知症の人と介護者とのコミュニケーション場面を、ボランティア団体に視聴して頂き、わかりやすさなどについてのヒアリングを行った。結果、具体的な場面とそれに対する認知症高齢者役の人の感想や専門家の解説が加わっており分かりやすかったという評価であった。さらに、『VR 認知症体験会』を実施し、前述したDVDに変えられるものではないことを確認した。

また、プログラムに用いる事例教材の精選のため生活行動を引き出すコミュニケーションスキルに関する学会発表(Koyama, S., et al, 2019)、教育プログラム構成の検討のためケア提供者を対象に実施した教育プログラムの評価について学会発表(小山・他, 2019)を行った。以上の結果より、表1に示す教育プログラム試案を作成した。

(2) 作成した試案の実施・評価

表1に示した教育プログラム試案を、申請者が教育活動をとおして関与しているボランティア団体に協力して頂き、3月に実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止とした。代わりに、その団体のメンバー数人にプログラムの概要と教材とするDVD、事例を含むスライド資料を提示して、ヒアリングを行った。結果、「DVDが本教育をうける動機付けになる」「スライドのイラスト付き事例による説明がわかりやすい」「認知症になってもそれまで培ってきた生活の習慣などは残っているとわかった」「自分が誘ったり、依頼したりする言葉かけでその人が持っている生活行動を引き出せるかもしれない。できるかどうか

わからないがやってみようと思う」などの意見が聞かれた。本教育プログラムの目的が伝わる
ことが示唆された。

今後は、地域住民を対象に本教育プログラムを実施し、評価して、プログラムを完成させる
とともに、広く活用できるよう実施マニュアルを作成していきたい。

表 1 教育プログラム試案

形態	内容	時間
	1 認知症の人とのコミュニケーションの基本	
	・コミュニケーション場面の DVD を用いて動機づけ	30 分
	・認知症の人を理解する視点とコミュニケーションのコツ (事例提示)	
	2 認知症の人の不安や困惑を低減するコミュニケーションの実際 (事例提示)	
講義	・認知機能障害を有する人の不安や困惑を少なくするコミュニケーション	30 分
&	・認知機能障害を有し易怒性が亢進しはじめる高齢者とのコミュニケーション	
演習	休憩	30 分
	3 認知症の人の生活行動を引き出すコミュニケーションの実際 (事例提示)	
	・認知症の人の生活行動を引き出す意義	
	・認知症の人の生活行動を引き出すコミュニケーション	
	4 質疑・応答	15 分

引用文献

桐谷あゆみ・森山美和子(2016). 認知症を有する人を介護する家族介護者のパートナーシップを築く力の向上を目指した教育プログラムの効果の検証. 日本看護科学学会誌, 36, 1-8, DOI:10.5630/jans.36.1.

小山幸代・片井美菜子・千葉京子・シェザード* 樽塚まち子・菅原峰子・櫻井正子(2015). 認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーションの特徴 エスノメソメロジー研究による相互作用分析から . 日本早期認知症学会誌. 8(2), 78~87.

Koyama S., Chiba K., Shahzad MT., Katai M., Watanuki, E. (2019). Communication skills to elicit daily life behaviors among elderly people with dementia (4th Report): Focusing on role-behavior. 32th World Congress on Advance Nursing Practice & Pediatric Nursing & Healthcare.

小山幸代・片井美菜子・蛸名由加里・行俊可愛・和田美奈子(2019). 認知症の人とのコミュニケーションスキルアップセミナーの評価. 日本早期認知症学会論文誌, 12(3), 50.

Machiels, M., Metzeltin, S. F., Hamers, H. S., Zwakhalen, S. M. G. (2017). Intervention to improve communication between people with dementia and nursing staff during daily nursing care: A systematic review. International Journal of Nursing Studies, 66, 37-46.

Shahzad MT., Koyama S., Chiba K., Sugawara M., Katai M. (2016). Communication skills to elicit daily life behaviors among elderly people with dementia (Second Report): Analysis of interaction between elderly people and staff in toileting support situations. Alzheimer's Association International conference.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小山幸代 片井美菜子 蛭名由加里 行俊可愛 和田奈美子	4. 巻 13
2. 論文標題 ケア提供者を対象とした「認知症の人とのコミュニケーション スキルアップセミナー」の実施とその評価	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本早期認知症学会誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Sachiyo Koyama, Kyoko Chiba, MachikoTaruduka Shahzad, Minako Katai, Emiko Watanuki and Mineko Sugawara
2. 発表標題 Communication skills to elicit daily life behaviors among elderly people with dementia (4th report) : Focusing on role-behavior
3. 学会等名 32nd World Congress on Advanced Nursing Practice (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小山幸代 片井美菜子 蛭名由加里 行俊可愛 和田奈美子
2. 発表標題 認知症の人とのコミュニケーションスキルアップセミナーの評価
3. 学会等名 第20回日本早期認知症学会学術大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 深谷安子 北村隆憲 小山幸代 若林律子 川口港	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版株式会社	5. 総ページ数 157
3. 書名 看護におけるコミュニケーション・パラダイムの転換 ケアとしてのコミュニケーション	

〔産業財産権〕

[その他]

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	千葉 京子 (Chiba Kyouko) (40248969)	日本赤十字看護大学・看護学部・准教授 (32693)	
研究 分担者	菅原 峰子 (Sugawara Mineko) (70398353)	共立女子大学・看護学部・准教授 (32608)	
連携 研究者	綿貫 恵美子 (Watanuki Emiko) (80327452)	北里大学・看護学部・准教授 (32607)	
連携 研究者	シェザード樽塚 まち子 (Shahzad Taruduka Machiko) (10406902)	北里大学・看護学部・講師 (32607)	
連携 研究者	片井 美菜子 (Katai Minako) (80623529)	北里大学・看護学部・助教 (32607)	